

わたしがはなをみつめるとき



わたしが はなをみつめるとき
はなも わたしをみつめている

はなは うたい
わたしは みをすます

はなとわたしのこきゅうは
しだいに ひとつになり

うちゅうは とおくから
わたしたちを みつめている

なつかしく
あたたかい
おいしいなる まなざしで

花

花

ということばは

ひとつの詩のようにおもえる

どこからか蝶がとんできて
ときおり風にゆれて

あしもとには

生と死を超えた土があり

目をこらせば

空がみえてくるよう

花

というそぼくなことはから

どこまでも どこまでも

世界は ひろがっていく

つめくさ

つめくさを
ながめていたら

かえりみちが
わからなくなりました

つめくさと

かたりあつたあとでは

せかいが

おおきすぎるのです



りんぷん

世界中の本棚から
わすれられていた本たちが
飛びさっていく夢をみた

閉じられていた本がひらき
蝶のように羽ばたくと

すべてのページに
風があたり
光があたり

文字は りんぷんとなって
こぼれていく

春の午睡のなかで
そんな夢をみた

ねむるまえよりも
ほんのすこし

世界が かがやいてみえたのは

気のせいでしょうか



せかい

ちいさなはなが
いっしんに
そらを見あげている

このはなの せかいは
おおきなそらで みたされていて

わたしのみている せかいよりも

ずっとずっと
ひろいかもしれない

なぜそらはあおいのか

なぜそらはあおいのかと
どうよくなまなごしで

なぜせんそうをするのかと
せんそうをしているひとに
といた

こどものようにまっすぐに
なんのぎも人も
あきらめもなく

どこまでもすんだ あおいこころで

せかいがへいわであることを
いのりたい

そらが あおい

そらが あおい

うまれてはじめて

あおいそらを みたとき

それを

ことばにすることは できなかった

じんせいのおわりに

あおいそらを みるとき

それは

いっぺんの詩になるのかもしれない

そらが あおい